

財団法人「白鳥・古民家ライブミュージアム」の設立と

「越美文化研究所」の旗揚げを応援する

国際日本文化研究センター顧問・哲学者 梅原 猛

西洋の文明が小麦農業と牧畜を経済基盤としたのに対し、東洋の文明は稲作農業と養蚕を経済基盤とした。そして前者がもっとも貴んだのは金と銀であり、後者が貴んだのはヒスイである。私は先年、中国浙江省の良渚（りょうしよ）遺跡を見学し、帰国後こんどは日本の北陸地方を旅行して、このことを強く感じた。どちらもヒスイのみごとな玉製品の遺物が多数発掘され、その年代も約五千年前とほぼ同時期にかさなり、偶然か必然か、双方の地域とも同じ「越（えつ）」の名で呼ばれている。

日本の文化が中国大陸からの強い影響のもとに発展し、その入り口が日本海に沿う地域であって、そこから漸次、内陸部へと浸透していったことは否定できない事実であり、その浸透のルートに河川の水運が利用されたことも、これまた確かなことである。しかし「裏日本」という名のもとに、これらの重要性はほとんど見過ごされてきた。

このたび、日本海にのぞむ越前と内陸の美濃とを結ぶ結節点の地に、かつて繭問屋をんだ古民家の保存とあわせて「越美文化研究所」を発足させるという。

この構想を抱いたのは、「仏像く心とかたち」や「日本と東洋文化」など多数のすぐれたテレビ番組を生みだし、また私とは四十数年来、仕事を共にしてきた元NHKのディレクター水谷慶一氏である。とくに一九七七年石見の海岸の町でひと夏を過ごし作った特集番組「人麿発掘」は忘れられない思い出だが、このように私と水谷氏の関心はつねに中央よりも地方のかくされた文化に対して、より多く向けられてきた。

今日の激変する社会にあって地方にのこる古民家の保存は、いっそう困難な課題になりつつあるが、水谷氏はこれを積極的に地域文化の拠点として「生きた博物館」に蘇えらせようとする。古民家ライブミュージアムと越美文化研究所を結びつけるアイデアは、かくして生まれたと聞いている。

ちなみに岐阜県郡上市は白山信仰とこれにつながる「円空佛」のゆかりの場所であり、二〇〇〇年に岐阜県があらたに設けた「円空大賞」の選考委員長をお引き受けした縁で、私もいく度か現地に足を運んだが、その魅力はまだなお秘められたままだと言えよう。

こんどの水谷氏の試みが地域に新しい知的刺激をもたらし、ひいては地域の活性化につながることを私は期待してやまない。なぜなら真の活性化とは、地域住民が文化的な自覚と自信を取り戻すことをおいて他に無いと確信するからである。

（二〇〇七年九月記）